

八月。

窓の外からは油蟬の轟く声。それだけでも額に汗が滲む。

青く透き通る真夏の空。入道雲の合間から燦々と太陽が差してくる。

そんな外の様子を縁側から見ながら、私——上白沢慧音は自宅にて夏休みを過ごしていた。

夏の補修や、次の学期の準備もなんとか終え、ようやく休暇を取る事ができた。とはいえ、寺子屋の授業が既に生き甲斐なためか、休暇と言われてもすることがなかったりする。かと言って、せっかくの休暇を何もせずに過ごしても良いものか。そう思いながら、居間に大の字で寝転がる。訪問者が来たら、いつもとのギャップで吹き出されるかもしれない。そう考えもしたが、既に動く気力すら残っていないかった。

暑い……。

口には出さない。それだけで、余計に暑く感じる気がしたからだ。

こんな暑さは、何十年に一度というくらいだ。

あの年も暑かった。

そう。それは、百余年前。

今でも忘れる事のない——

「慧音さん」

油蟬の声に混じって、私を呼ぶ声がある。

目を開けると、くりくりとした目が私を見下ろしていた。私が気付いた事を確認した少女は、優しく微笑んだ。

「慧音さん、おはようございます」

少女が深々と頭を下げる。体を起こし時計を見ると、針は既に二時を回っていた。

『おはようございます』は昼過ぎに使う言葉じゃないぞ」
 そういうと、少女——稗田阿弥は子供のように頬を膨ら

ませ、言い返す。

「慧音さんは今ようやく起床ですからこれでいいんです。それにしても、ひどい顔していますよ」

そう言うと阿弥は私を指さして笑った。頬を手でなぞると、デコボコしていた。

「……昼の痕か？」

阿弥はやれやれといった面持ちを見せる。

「教師たるもの、寝る場所とかにも気を配るべきだと思えます」

「そんな私の勝手じゃないか」

「私が嫌なんです！」

「……なんで？」

「私は慧音さんの先生なんですから」

「先生……ねえ」

どう見ても年下。上から、童顔、まな板、以下一直線。

上手く言うなら、『見事な直線美』。……先……生？

「慧音さん」

「ん？ あ、どうした？」

「外見だけで、人を判断してはいけないと思います」

「だれもそんなことしてないじゃないか」

「そうですか？」

「ところで、先生、という言葉は阿弥には似合わないと思

うぞ」

「何故ですか？」

「……いや、なんとなくだ」

由緒正しい『阿礼乙女』の八代目である。

阿礼乙女は、代々『幻想郷縁起』という書物を書くという使命がある。

これに事細かに記された情報は、数知れず。一般常識から、外の世界の事まで。

後世の子供達に残していくためにか、この書物は寺子屋の教科書にも使われている。

だからそれを読んで子供たちを教えている私の『先生』と言いたいのだろう。

そんな『幻想郷縁起』を書くためにか、阿礼乙女たちは記憶の一部を持ちながらにして、『転生』する。なので、表情は同年代の人より豊かで、どこか大人びている。

そのせいか、阿弥は私と同じ年のように接する。だが、敬語は使うようだ。そこらへんの気遣いも、『記憶』の影響なのだろうか。

「それにしても、わざわざこんな暑い中訪問してくるなんて、一体どうしたんだ？」

「いえ、特に理由はないんです」

「特に理由もなく、こんな町から離れた辺鄙なところまで来るのか？」

稗田阿弥。

「強いて言えば、慧音さんの顔が見たくて」

「……それ、本気で言ってるのか？」

「冗談に決まってるじゃないですか」

「だろうな。で、真意は？」

「本当に理由はないんです。ただ、ちよつと散歩したくて」

「気がつけば私の家に来ていた、と」

「そんな感じですか」

「……茶でも出そう」

「有り難うございます」

キツチンに向かう。

眠る前に買っておいた氷を崩しながら、阿弥の心中を考えてみる。わざわざここまで来る意味はなんだろうか。町から三十分程度民家もない田圃道を歩かないと私の家には着かない。私の家の前で田圃道も途切れ、裏手は山。つまり、本当に散歩だとしても私の家を目的とせねばここまで来ないはずだ。

「……では、何故そこまでして来ようと考えたのだろうか。」

崩した氷をビードロのグラスに三、四個入れる。そして、

麦茶を注ぐ。

それをお盆に載せ、居間へと向かう。

「ま、いいか」

「え？ 何か言いましたか？」

「いいや、なんにも」

とりあえず、深く考えない事にした。誤魔化すのにも何らか理由があるだろう。

それに何故か、阿弥が悲しそうに見えたから。

阿弥は色々な話を聞いてもいないのに語り出した。

別に嫌なわけではない。彼女は様々な事を知っていて、話を聞いているのはとても面白い。妖怪の話や異変の話。

だがそれ以上に、滑舌があまり良くなく、身振り手振りで必死に話を伝えようとする彼女を見るのが面白い。それを言えば、そんなことありません！とムキになるのが目に見える。

そんな面白さに気を取られながら話をして、ふと外を見れば既に夕日は沈みきろうとしていた。

「阿弥、時間はまだ良いのか？」

「あ……はい、大丈夫……です」

歯切れの悪い言い方だ。

こういう言い方をする時は誰しも、大抵何か理由がある時だ。だが、阿弥がこんな言い方するのは初めてだ。

その時私は「そうか」と流せば良かったのだろうか。「何

かあったのか」と尋ねるべきだったのだろうか。

私はいつの間にか後者を選択していた。言いにくいからそういう言い方をするのだと知っていたのだが、阿弥が隠すほどの『何か』に興味を抱いてしまったからだろうか。

自分でも分からなかった。

「やっぱり……お邪魔ですか？」

「……いや、そんな事はないが」

「……お話したい事があるんです」

「……なんだ？」

「私は本当に、『阿礼乙女』なんででしょうか？」

「どういう意味だ？」

「歴代の『阿礼乙女』の文献を読みました。そこには、『阿礼乙女』の項もありました」

「……」

「それで分かったんです。……私は、『阿礼乙女』ではなく、ただの人間だということが」

「そんなわけがない！ お前は『稗田』阿弥だ！」

「何故そうやって言いけることができるんですか？」

「……」

「証明できるのは名前だけでしょう？ そんな曖昧なものですか証明ができない……。名前なんて、誰でもつけられ

ます。私が『阿礼乙女』である証明になんかなりませんよ……」

「何バカな事を言ってるんだ！」

「だって！」

阿弥は反論しようとしたが、口に出すか悩んだ素振りを見せ、下を向いてしまう。口から出た言葉は考えてもいなかった言葉だった。

「……私には、『求聞持の能力』が無いんです……」

『求聞持の能力』

見聞きした物事を全て記憶する、稗田家独特の、『幻想郷縁起』を書いたための能力。

「私は、見聞きした物事を全ては記憶できません……。自分の手帳を元に記憶を断片的に思い出だけです……」

「……」

沈黙してしまう。確かに、外で阿弥を見掛ける時、いつもメモを取っていた。『メモを取るのはきつと、自分の考察を書いているのだ』と考えていた。見聞きした物以外は『求聞持の能力』の対象にはならないから。まさか阿弥が、遺伝で引き継ぐはずの『求聞持の能力』を持っていないなど、

考えもしなかったから。

「……私はずっと、『求聞持の能力』とは後天的な能力だと考えていました。誰もそんなことを教えてくれる人はいませんでしたから。私の仕事は、私の生きる意味は……『幻想郷縁起』を書く事だから、能力が宿る時を待ちました。『阿礼乙女』の名を汚すことの無いように。……ですがその能力は私に宿らない事が分かりました。何故なら……文献の『阿礼乙女』の項には、能力についても触れていました。そしてそこには『生まれ持った能力——求聞持の力』。私には能力が宿る事はない」

「お前は間違いなく『阿礼乙女』だ！」

「いいえ、違います！ 『求聞持の能力』を持たない私は、『稗田』の名前を継ぐべき者じゃない……私は『稗田』にふさわしい存在ではないんです。ただの……」

ドサツ

何が起こったのか分からなかった。何の音なのか分からなかった。

思考が停止した。空間が一瞬、静寂と化した。

視線を落とすと、阿弥が倒れていた。

脳内が急速に回り出す。

「阿弥。阿弥……？」

返事はない。頭が空回りしてしまふ。何が起きたか分からない。

どうすれば良いんだ……？

「……そうだ、医者に診てもらえば……！」

バンと大きな音を立てて扉を開け、私は阿弥を抱き、夜の闇を駆けた。

靴を履くのを忘れた。

帽子をかぶるのも忘れた。

空には煌々と望月が輝いている。

足が土で汚れる。

額から汗が顔を伝い落ちる。

風で髪が乱れる。

そんなのは気にしなかった。

腕の中が冷えていくのが分かる。

駆けた。

ただひたすらに駆けた。

「慧音……さん」

「！」

いつ意識が戻ったのか、阿弥が声を掛けてきた。

「慧音さん、は、何を、急いで、いるんで、すか？」

「そんなこと！ お前を助けるためだ！」

「それなら、もう、大丈夫、です」

「どこが大丈夫だと言うんだ？」

「……それが……運命ですから」

「！」

不意に足が止まる。阿弥は私の腕から抜けて私の前に向き合う。

「……それは、一体どういう意味だ」

「私はどうやら、『阿礼乙女』では、あつたよう、です」

「……」

呟く程の、か細い声で阿弥は語り出す。私は、焦りを抑えながら静かに聞いた。

「私が、過去の文献を読んだという、話は、しましたよね」

「……ああ」

「その中の、『阿礼乙女』の、項には、能力の他に、ある事が、書いてあつたん、です」

「ある事……？」

『阿礼乙女は一万と五九二日しか生きられない』。こうみえても、私、今日が、三十歳の誕生日、なんです。つまり

「やめてくれ！」

思わず大きな声が出る。続く言葉が頭の中に浮かぶ。

「今日が」

阿弥が生まれたのが閏年の翌年。

「私の」

先の言葉を私の口も勝手に奏でる。

「一万と五九二日目……」

「よく、分りました、ね」

「……」

「流石、慧音さん、です」

阿弥は、笑顔で私の頭を撫でた。

「……何故そんな日に、私のところまで来たんだ……？」

「……慧音さんの、家まで、行ったのは、ちゃんと、理由が、あつたんです」

「ちゃんとした……理由？」

「……はい、慧音さん」

「……ずっと……大好きでした」

「！」

「もちろん、恋慕の意味、ですよ？ ……だけど、慧音さんは、私に構わず、好きな人、見つけてください。所詮、亡くなる者の戯言ですから。」

「……バカ」

「？」

「私も、お前がずっと好きだ」

そう告げると、少し困り顔で、阿弥は笑った。

「ありがとうございます……ごさいます」

そして阿弥は、大きく息を吸って、それを一気に吐いた。

それが、最後の一息だった。

「……阿弥？ 阿弥？」

息をしなくなった阿弥を見て、涙が小雨から、土砂降りに変わった。

救えなかったのだろうか。その命は。運命だったのだろうか。その結末は。

頭の中を走馬灯の様に阿弥との思い出が駆けていく。

声が枯れるまで、むせび泣いた。

その声は、どこかに届くわけでもなく、望月に消えていった。

「慧音さん」

油蟬の声に混じって、私をよぶ声がある。

顔をあげると、くりくりとした目が私を見ていた。私が気付いた事を確認した少女は、優しく微笑んだ。

「慧音さん、おはようございます」

少女が深々と頭を下げる。

「——阿弥？」

「？」

違った。あれから百余年もたったのだ。既に稗田阿弥はいない。

目の前にいるのは、『阿礼乙女九代目 稗田阿求』だ。

「いや、なんでもない」

「あ、慧音さん、寝ぼけてましたね？」

「寝てなんかいない！」

「頬に暈の跡をつけていて、よく断言できますね」

「……これは……その……」

「どうかしました？ 大きな声で言ってみてください？」

意地が悪い。どこかの誰かとそっくりだ。顔も、心も。

「あ、そういえば大福餅があったな」

「いただきます」

即答。

純真無垢な子供のようだ。

大福餅を頬張る阿求を見て、そんなことを思った。

「……今日は十九歳の誕生日か」

「！……慧音さん、覚えていてくれたんですか？」

「忘れるわけないだろう」

「では、早速」

右手の平を上に向けて、私に突き出してきた。私は、それに右手を重ねる。

「……わん」

「お手じゃないですよ」

「冗談だ」

私は、阿求の右手の平に小箱を置いた。

「ありがとうございます！ 開けても良いですか？」

「ああ、勿論」

きつと喜ぶだろう。わざわざ町に出て選んできたのだから。

「わあ、綺麗な櫛……本当に良いんですか？」

「じゃあ返してくれ」

「嫌です！ ありがとうございます！」

阿求は今年で十九歳。生まれたのは閏年の翌年。だから今日で六九三九日目。あと四千と五三日。

悲しい別れにならないように、一日一日、一緒に、大切に過ごしていこう。

そう、心に誓った。

あとがきみたいなもの

ここまで読んでくださりありがとうございました！

サークル「いろえんぴつ」、さくらです。

今回は、イベントから一カ月経ったということで、原稿をそのままアップしました！ まだまだ切り詰めなければいけない部分があるので、完全版、というわけではないです。

そのうち公開予定。

世間は地震や津波で大変ですが、こういう時こそ、強くあらねばいけませんね。

それでは、手短ですが。